

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號五第 卷一十第

論 說

歴史と社會學との關係(一)……………法學博士 財部 靜治

地方稅としての地租の課稅標準……………法學博士 神戶 正雄

限界的生産力の勞賃說……………法學博士 田島 錦治

農業社會主義的土地改良論者……………法學博士 河田 嗣郎

價值論上のリカルドとマルクス(二)……………經濟學士 堀 經夫

時事問題

北支那の飢饉……………法學博士 戸田 海市

雜 錄

濠太利の貿易と海運……………法學士 小島昌太郎

徳川時代に於ける農本の意義……………法學士 本庄榮治郎

將來の産業的指導者としての日本及び其他の諸國……………法學士 石川 興二

京都市經濟學會第二回講演會記事……………法學士 大森 研造

保險に關する新著紹介……………法學士 小島昌太郎

價值論上のリカアドとマルクス (二)

堀 經 夫

以上を以て、余は、リカアドの價值論の個々の點に就て概説と試み且つ之をマルクスの所説に比較し終へたのであるが、然らば次に、兩者の價值論を全體的に觀察する時、吾々は其の間に如何なる關係を見出すことが出来るであらうか。換言すれば價值論上リカアドの打ち立てたる體系とマルクスの打ち立てたる體系とは如何なる關係があるのであらうか。是れ、余の進んで研究せんと欲する所である。而して此點に關しては、古來幾多の説が行れて居て、歸一する所を知らない有様であるから、余は先づ諸學者の説を分類列擧し、然る後に其是非を討究することとする。

二 リカアドとマルクスとの關係に對する

種々なる見解

價值論上に於けるリカアドとマルクスとの關係に就て、諸説紛々として定まらざることば、既に述ぶるが如くであるが、余は此等を大約三種に分類することが出来ると思ふ。¹⁾

- (イ) マルクスは、リカアドの價值論を其儘の形に於て繼承し、而して之を發展、徹底せしめ、

1) 本誌前號(第十一卷第四號)拙稿冒頭參照

或は之を別の言葉で言ひ表はしたのであるとなすもの。

ジョン・スバアゴは、其著「カアル・マルクス、彼れの傳記及び事業」に於て、次の如く述べて居る。

『マルクスの方が、説明がより明瞭であり且つより正確である以外に、彼は、彼の價值の論じ方に於て、リカアドと殆ど異つて居ない。有名な條に於て、リカアドは明かに社會的勞働なる概念を解説し、さうして一貨物に實際に體現されたる勞働の分量でなくして、寧ろその生産に必要な勞働の分量が、其の價值を決定することを説明して居る。靴下を例に採つて、彼は「人間勞働の分量」なる言葉の中に、生棉の栽培から工場に於ける靴下の製造に至るまでの、靴下製造に直接關係せる人々の全勞働のみならず、船舶の建造並びに航海に、工場及び機械の建築に、及び其他のことに含まれて居る、總ての間接勞働をも包含せしめて居る。マルクスはリカアドに倣ひ、さうして此等の觀念を更にもつと發展せしめて居る、而して彼れの經濟論に對する總ての批評——彼は、商品に實際に體現されたる、單純なる直接の勞働を、その價值決定要素と看做して居る、その(誤れる)假定に本いてなさるゝ所の、——は、重きを置くに足らないのである。』⁴⁾

又スバアゴは、『リカアド・マルクスの價值論』なる言葉を用ひて居る。

右に引用せる所に依つて既に明かなる如く、スバアゴは、マルクスを以て單にリカアド説の繼承者であり大成者であると爲したのである。

- 1) David Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, Chapter I, III.
- 2) 彼はマルクスを指す。
- 3) 譯者挿入
- 4) John Spargo, Karl Marx: His Life and Work, (1912), p. 343.
- 5) The Ricardo-Marx theory of value. cf. *Ibid.* p. 345.

アアノルド・トインビーは、其著『英國に於ける十八世紀の産業革命』に於て、リカアドを論ずるに當り、

『デイヴィッド・リカアドが、アダム・スミス以上に、より大なる影響を、人々の實際的の行爲並びに社會問題の理論的の思索に及ぼしたることは、間違なく言へるであらう。彼れの書物は、中等階級の大なる後楯となつたと同時に、彼等の最も恐ろしい脅威となつた、何故脅威となつたか、蓋し此書物よりして直接に二つの大なる社會主義の教科書が生れ出たから、即ちカアル・マルクスの「資本」とヘンリー・デョウヂ氏の「進歩と貧困」とである。』¹⁾

と謂ひ、又

「……此處に、夫等の人々を通じてリカアドが中等階級の恐怖となつた所の、社會主義者達が居る。社會主義者達は、リカアドが不變なりとなした所の社會状態を變更することによつて、彼れの結論を避け得るものと信じて居る。カアル・マルクスとラツサールとは、リカアドの賃金の法則を採用した。……マルクスは又、リカアドの價值論をもまるで受け納れた。リカアドは、生産物の價值がそれに費されたる労働の分量によつて決定されることを、述べた、而してマルクスは、此説明を利用して、生産物の全價值は正當に労働に屬すべきものであつて、生産物を資本と共に分け合ふことによつて労働者は奪はるゝのである、その定理を演繹して居る。』²⁾

と謂つてゐる。是に由て觀れば、トインビーも亦、マルクスをリカアド説の無批判的受納者なりと看做したることが明かである。

- 1) Arnold Toynbee, Lectures on the Industrial Revolution of the Eighteenth Century in England, (1919), p. 109.
- 2) *Ibid.* p. 113.

次に、マルクス説の忠實なる解説者たるカアル・カウツキーの所説を見るに、彼は、其著「カアル・マルクスの經濟説」に於て、

『商品の價值の大きが、其生産に消費したる労働の分量に依つて定まるといふことは、マルクス以前既にリカードが之を認識した。けれどもリカードは價值としての商品の内部に伏在する労働の社會的性質、即ち商品の拜物教的性質を看取しなかつた。同様にまた彼は、商品の價值を構成する労働方面と、其使用價值を形成する労働方面とを、明白に、又鮮明なる意識を以て區別しなかつた。』

と謂ひ、又、

『「哲學の窮困」に於ても、また「賃銀労働と資本」に於ても、彼（マルクスを指す——引用者註）はまだ労働の價值を説いてゐた。それが何時の間にか労働力の價值に變つて行つた。然るに一般經濟學者は、此労働と労働力との區別の意義を理解しなかつた。彼等は今でも尙ほ、此兩概念を混同してゐる。彼等は好んでマルクス・ロオドベルツス式價值論を喋々する。而かもロオドベルツスがリカード價值説を其労働及び労働力の混同、併びにそれより生ずる矛盾撞着ぐるみツツクリ受け繼いだに反して、マルクスは此點に於て、又其他の根本的諸點に於ても（例へば價值形成労働を社會的に必要なる労働に限りたるが如き、又一般的價值生産労働と使用價值を造る特殊労働とを區別したるが如き）リカード價值説の矛盾を悉く一掃し、此價值説よりして始めて鞏固なる基礎を有する完全な眞正の價值説を造り上げた。』

1) 高島氏邦譯『カアル・マルクス資本論解説』(第三十頁)に據る。

2) 前掲書(第三五二頁)に據る。

と謂つて居る。此等の言を以て察するに、カウツキーは、貨物の價值がその生産に要する労働の分量によつて決定さる、といふ労働價值論の根本命題に於て、マルクスとリカアドとは相一致して居ることを認め、只此根本命題を説明し或は之を推論して種々なる結論を求むる上に於て、マルクスがリカアドに數等勝つて居り、且つより徹底して居ることを主張してゐることが、明かである。されば、カウツキーを以て、『マルクスは、リカアドの價值論を其儘の形に於て繼承し、而して之を發展、徹底せしめたのであるとなすもの』の一人に數ふるは、蓋し正當であらう。

河上博士は、其著『近世經濟思想史論』に於て、リカアドの労働價值論を説明せられたる後に、次の如く言つて居らるゝ。

『リカアドの労働價值とは此の如きものである。さうして此範圍に於ては、後に説く所に依つて明かなる如く、マルクスの労働價值論及び剩餘價值論と、其議論の立て方が殆ど符節を合する如くである。既にマルクスの労働價值論を御承知の方は、以上述べ來つた所によつて、如何にリカアドに依つてマルクス以前既に彼と同じやうなる思想が述べられて居るか、と云ふことを首肯せらるゝ譯であらうと思ふ。そはマルクスの労働價值論及び剩餘價值論と其議論の出方が殆ど同じことなのである。然るにリカアドはアダム・スミス、マルサスと共に資本主義經濟學の建設者の一人であるに反し、マルクスは社會主義經濟學の建設者であると云ふやうに、兩者の立場が全然相違して居るのは、一見すれば如何にも不可思議のことであるが、其實リカアドは労働者が自ら生産したる價值の僅に一部分をば其賃銀として受取りつゝあることを以て、經濟上

の自然的法則に基く己むを得ざるの現象となしたるに反し、マルクスは之を以て資本家による掠奪となし、且斯かる掠奪關係を廢止するの目的を以て、此の如き經濟上の法則を必然的ならしむる所の資本主義の經濟組織を廢止し、之に替ふるに掠奪關係の絶無なるべき社會主義的組織を以てせんことを主張するに至つた譯である。即ち両者が略ぼ同一の事實を認識しながら、其結論が甚しく相違するに至つたのは、主として其立場の相違に基くのである。¹⁾』

是に由て觀れば、河上博士は、マルクスとリカアドとが正に同一の労働價值論から出發し乍ら、其立場が相違せる爲め、一方は利潤なるものを労働者よりの掠奪物なりと看做すことによつて資本主義經濟組織否認論を懐くやうになり、他方は利潤を正當なる資本家所得なりと看做すことによつて資本主義經濟組織辯護論を生むやうになつたのである、と説明して居らるゝやうである併し乍ら博士が両者の主張の出發點たる價值論に關する限りに於ては、両者『殆ど符節を合する如くであつて』其間に何等の根本的差異を認められ居らざることに着眼して、余は博士を以て『マルクスは、リカアドの價值論を其儘の形に於て繼承し、而して之を發展、徹底せしめたのであるとなすもの』の一人に加ふるのである。

更に、リカアドが純粹なる労働價值論を最後まで固執するを得なかつたことを認むると同時にマルクスも亦リカアドと同様之を徹底せしめることが出来なかつたことを主張し、斯くて両者の見解が——言ひ表はし方の相違はあつても——正に相一致するものと思考する所の學者を、余は茲に例示しなければならぬ。蓋し、此の如く考ふるものも亦、『マルクスは、リカアドの價值論

1) 河上博士、近世經濟思想史論、二三九頁乃至二四〇頁

を其儘の形に於て繼承し、而して之を發展、徹底せしめ、或は之を別の言葉で言ひ表はしたのであるとなすもの』に屬するが故である。

例へば、小泉信三氏は、最近の『國民經濟雜誌』に於て、『ロオドベルトスの労働價值學說と平均利潤率の問題』を論せらるゝに當り次の如く述べて居らるゝ。

「労働價值說に取て最大の難關が利潤率均一の事實(若くは傾向)であることは、既にマルクス『資本論』第一卷と第三卷との間に所謂「矛盾」する事實に依て、充分明かに證示せられて居る。

若しもマルクス等の主張する様に、價值が投下労働量の上に依て決定せらるゝものならば、同額の資本を投じて生産を行ふ場合と雖も、その資本中労働者雇傭の爲めに投せらるゝ部分の割合が相等しからざる場合には、(註—省略)新たに産出せらるゝ價值量は相等しからざる可き筈である。従て同額の資本が生むところの利潤額は、資本の有機的組織が異なるに従つて相違しなければならぬ筈である。然るに目前の事實は此理論に反して居る。利潤率は諸多の産業を通じて均一に歸するの傾を示し、マルクス其人も亦敢て此事實を否認しなかつたのである。其處でマルクスの價值理論と平均利潤率を其構成要素とする其生産價格の理論との關係は、多數經濟學者に取ては甚だ不可解のものとならざるを得ない。……併し之はマルクスに就てのみ云はるべき事ではない。苟くも労働價值學說を徹底的に主張するものは、何人も此障害に逢着せざるを得ないので、若しリカアドの如きも、價值に關する其論究を其「原論」の始めの三節(第三版以後に就て言ふ)に限り「……貨物の交換價值若くは一貨物の幾許量が他の貨物と交換せらる

べきやを決定する規則は、殆ど全く其の各々に投せられたる労働の相對量に由て決せられる」と云ふに止めたならば、彼れの價值論は必ず利潤率平均の事實と相容れぬものとなつたに相違ない。然るにリカアドは、人の屢々速了するやうに、單純な労働價值論者では決してなかつた。……(中略)……極く大體に於て、リカアドをして單純素朴なる労働價值説の取るべからざる所以を覺らしめたものは亦た、マルクスをして價值とは異なる生産價格に到達せしめた同じ平均利潤である云つても差支なからうか。¹⁾」

以上小泉氏によつて述べられたる所と同一の意見は、之を他の學者の所説中にも發見することが出来るのであるが、余は更に一例を示すであらう。

ゲオルグ・ハーニツシュは、其著『正統派の諸價值論』に於てアダム・スミスの價值論を評論したる後に次の如く述べて居る。

『終りに吾々は尙ほ、労働原費説がリカアドに在つては如何なる形體を採つたか、を觀察せんと欲する。人がかゝる事柄に就て論するならば、それでもつて吾々は恐らくマルクスの價值論をも片附けることになる。蓋しマルクスは實にリカアドの労働價值論をほんの非本質的なる修正を以て受け納れたのであるから。²⁾』

斯くて彼は、リカアドに在つて、労働價值論が初めは純粹なる労働價值の議論から出發して居るが、後に至つて次第に變化し、遂に『本質的の修正』を必要とする迄の經過を、詳細に説明して居る。而して最後に曰く、

1) 國民經濟雜誌第二十九卷第三號第一頁乃至第三頁。圈點は新たに附す。便宜上、文中の原語を日本文字に改め、所々に讀點を増加した。尙ほ此論文は同氏の近著『經濟學說と社會思想』中に、第一章附論として載せられてゐる。

2) Georg Hanisch, Die Klassischen Werttheorien, S. 35.

『國民經濟が進歩するに從て益々資本使用の影響が作用して來る。そこで商品は、正常の狀態の下に於てすらも、最早その自然價值(即ち勞働價值——譯者註)に於てなくなり、その變動を受けたる價值で——この價值は大抵の場合には、繼續的に自然價值の上又は下に在るものであるが——賣却される。商品の偶然的なる市場價格は、最早勞働支出によつて決定されたる價格の周圍を上下するのではなくて、變動を受けたる價格の周圍を動搖するのである。』¹⁾

尙ほ右に脚註を施して、
『リカアドの弟子であるマルクスは、此説を彼れの著「資本」の第三卷に於て「生産價格」の論に進
展せしめた。』
と附言して居る。

以上ハーニツシュ並びに小泉氏の所論に就て觀るときは、マルクスはリカアドの勞働價值修正論をその儘繼承し而して之を他の語を以て説明したるものであつて、從てマルクスの價值論とリカアドのそれとは全然同一物であるかの如くである。

扱て以上列擧したる所により、余は、マルクスを以て單なるリカアド説の繼承者であると解する學者の所見を明かにし得たりと信するものであるが、斯の如き解釋は普通に可なり廣く行はれて居るやうである。併し乍ら、果してこは正鵠を得たものであらうか。此事は以下述ぶる所に依つて追々と判明すること、思ふが故に、敢て此處に於て詳細に其當否を論ずることは爲ない。

1) Hanisch, a. a. O., S. 43.

たゞ今は、スバアゴ、トインビー、カウツキー及び河上博士等の解釋は、リカアドの『原論』の第一章の前半に載せられたる價值論を以て直ちに彼れの價值論全部なりと解し、而して之をマルクスの『資本』の第一卷の最初の一小部分に論せられたる價值論に比較して得たる結論であつて、稍不十分であるといふ事、更に小泉氏及びハーニツシュ等の見解は、單にマルクス及びリカアドの所説の結論と考へらるゝ所のもの——果してそれ等が両者の正當なる結論であるかどうかは、頗る疑はしいのであるが、——の外面的一致を以て、其の本質的合致なりと速斷し、かくて餘りに形式に趨つた觀がある事、を附言して置けば足る。

□ リカアドの價值論とマルクスのそれとは、其外觀に於て甚しく相類似して居るけれども、其實質に於ては全く別種のものに屬すとなすもの。

フランツ・ペツリーは、其著『マルクス價值論の社會的内容』に於て、マルクスのリカアドに對する關係に就て論じて曰く、

『諸々の社會的相互依存關係を量る尺度としての勞働を此の如く解釋して、其上にマルクスの勞働價值論が樹てられて居るのであつて、從て彼れの勞働價值論は、其の實質的意味より觀るときは、一つの社會的分配論として現はれる。是を以てマルクスは、リカアドと正反對の立場に立つて居る、リカアドの勞働價值論は本統を言へば一つの價格論に過ぎないのであつて、又其の分配の概念は全く個人的性質のものである。マルクスのリカアドに對する關係は、マルクス自身をすらリカアドの後繼者であり又完成者であると感ずるに至らしめた所の、マルクス自ら

の解釋に依つて、屢々誤解され來つた、蓋し單なる外面的類似的の背後に、根本的なる、此兩思想家の全然異なる哲學的素因によつて條件付けられたる、相違が作用して居るからである。』又曰く、

『扱てリカアドにとつては、労働が、價值の原因として(彼れの)特徴ある作物(の組立)に役立つて居るのであるが、リカアドは全く剩餘價值論には進み得なかつたのである。……誰れカリカアドに於て一個の剩餘價值論を捻出するものあらば、其人はリカアドとマルクスとの間の根本的の、組織の上の差異を無視し、從て兩思想家の正當なる關係を不明にするものである。一見して全く類似して居る労働價值論を非常に異つて構成したる點に、正に社會生活に對する兩者の全然異なる立脚點が暴露されて居るのである。リカアドにとつては、……彼が全くスキスの意味で困難及び苦痛なりと解した所の其労働が、貨物の交換價值の大きさを決定する所の他の諸原因と相並んで、其中の一つに過ぎないのである。』³⁾

此の如くペツリーは、マルクスの價值論とリカアドのそれとを、其表面的の一致に拘らず、全く別種のものとして看做し、マルクスの價值論を労働價值論と言ふべくば、リカアドのそれは之を價格論と唱ふべきものであると解したのである。

ツウガン・バラノヴスキーは、其著『マルクス主義の理論的根據』に於て、次の如く言つてゐる。

『貨物の産出に必要な労働支出に、リカアドは、總ての隨意に増加し得る商品の平均價格を支

1) Franz Petry, Der Soziale Gehalt der Marxschén Werttheorie, S. 33.

2) 譯者挿入

3) Petry, a. a. O., S. 35.

配する所の、最も重要な——然し決して唯一なるではない——客觀的要素を發見した。労働のみが價值の實體であるとの考は、リカアドには全く無かつた。此事は此頃公けにされたるマツカロツクへの彼れの手紙からも察知することが出来る。……以下略……

「時間といふ要素が、リカアドにとつてはもう一つの、さうして労働より全く獨立せる價值要素である。……以下略……」

「リカアドの價值説は、相對的労働價值論である、と言ふことが出来る、蓋しそは、労働を價值の絕對的實體と見ないで、たゞ商品の價值を決定する、相對的に重要な根據であると見たからである。」

「併し、茲に労働を價值の絕對的實體なりと認むる所の、從て絕對的労働價值論と呼ぶことが出来る所の價值論がある。そはロオドベルツス及びマルクスの價值論である。」¹⁾又論じて曰く、
「マルクスの價格論は、總ての重要な諸點に於て、リカアドのそれと合致してゐる、然るにマルクスの絕對的労働價值論は、リカアドの相對的労働價值論とたゞ名稱を共通にして居るに過ぎない。リカアドは、労働を多くの價值要素の中の一つと見たが、マルクスにとつては、労働は、價值の實體それ自身である。」²⁾

是に由れば、マルクスとリカアドの價值論は同名異種のものであつて、一を絕對的労働價值論といふならば他は相對的労働價值論ともいふべきである、とバラノヴスキは考へたやうである。

次に余は、マルクスの價值論を以てリカアド説の誤解に發したるものであると思惟する學者の

1) Tugan-Baranowsky, Theoretische Grundlagen des Marxismus, (1905), S. 135-136.
2) Tugan-Baranowsky, a. a. O., S. 138-139.

説を擧ぐべきであらう、蓋し一學説の誤解に出でたる他の學説は、其實質に於て前者と全く異れるものであるから。

アルフレッド・マアシャルは、其著『經濟學原論』に於て次の如く述べて居る。

『生産費の價値に對する關係に就てのリカアドの説は、經濟學史上極めて重要な地位を占めて居る、だからその眞實の性質を少しでも誤解すれば、必然的に甚だ有害たらざるを得ない、而して不幸なことには、リカアドの説は十中八九誤解を招くやうに述べられてある。……爰に次のやうな議論がある、即ちリカアドは需要が價値を支配する上に於て重要な役目をしてゐることを知つて居た、しかし彼はその作用を生産費の作用よりもより不明瞭なものでないと思つた、そこで、そのことをば、彼が彼れの友人及び彼自身の用に立てた所の備忘録に於ては、無頓着に看過した、……又彼は生産費が——生産に消費されたる労働の單なる分量に依つて左右されるものとリカアドが看做した、このマルクスの主張と異り、——その労働の質並びに量に依つて左右され、又それと共に労働を補助するに用ひらるゝ蓄積されたる資本の分量、及びかゝる補助が爲さるゝ時間の長短によつても亦左右さるゝものと看做した、と』又曰く、

『……一工場に於ける紡績が、機械の損耗に對して斟酌をなしたる上は労働者の労働の生産物である、といふは眞實でない。そは彼等の労働の生産物であると同時に、雇主及びそれに從屬せる管理者の生産物であり、又使用された資本の生産物である、而して其資本それ自身は労働と待望との生産物である。だから紡績は多種の労働並びに待望の生産物である。若し吾々が、

1) Alfred Marshall, Principles of Economics, (1916), p. 503.

2) Waiting.

それを労働のみの生産物であつて、労働と特等との生産物でないとするならば、吾々は疑もなく冷かなる論理によつて、特等の報酬である所の利子を正當なるものとなすことが出来ないやうに餘儀なくせらるゝ、何故なれば、此結論は既に前提中に含有されて居るから。ロオドベルツス及びマルクスは、げに大膽にも彼等の前提に對し、リカアドが其典據なることを主張する併し彼等の前提は、彼れの明かなる叙述及び彼れの價值論の一般的傾向に反し、又常識にも反する。¹⁾』

斯くてマアシャルは、リカアドの價值論が、普通考へらるゝ如く純粹の労働價值論にあらずして、今日の資本主義的經濟組織の内に於て是認せられつゝある所の利子、利潤等の現象を十分説明するに足る所の完全なる價值論なることを主張し、而してマルクスはリカアドを誤解して其價值論を樹立したるものと看做して居る。尙ほマアシャルは、此事を前掲書の附録に載せたる『リカアドの價值論』中に述べて居る。煩を厭はず其一部を譯出するならば次の如くである。

『彼は(リカアドを指す——譯者註)、嘗て波れの(書の)第一章第六節の終りの註に於て、實に次の如く言つて居る。「マルサス氏は、一物の原費と價值とが同一であるべき筈である、といふが余の學說の一部であるを考へて居らるゝやうである。若しも彼が原費を解して、利潤を含む所の生産費を意味するものとするならば、氏の言はるゝ通りである。(併し)上の章句に於ては、どうも此は彼の意味せざる所である、それ故に彼は私のいふことが明かに分つて居ない。而かもロオドベルツスやマルクスは、物の自然價值は全然それに費されたる労働より成立す、との

1) *Ibid.*, p. 587

2) 譯者挿入

3) 譯者挿入

叙述に對してリカアドが其典據なることを主張する、而して此等の結論を最も強く攻撃するドイツの經濟學者さへも、屢々彼等（ロオドベルツスとマルクス）がリカアドを正當に解釋して居ること、及び、彼等の結論は論理的に彼（リカアド）から導き出さるゝものなることを認めて居るやうである。²⁾』

又、ゴンナアは、彼れの版本に成るリカアドの『原論』の序論に於て、同様の意見を述べて居る。

『不完全なる假定を基となしたる彼れの演繹は、豫見だも爲なかつた不祥なる結論に導いた、といふことが主張されて居る。現代の社會主義學派は、リカアドに根據を置いて居るといふことである。そのことは全く本統である。……事實上、彼等の要求は一連の誤解を基として居る。リカアドが勞働を解して、長い間に競争に依つて價値を支配するものだと論ずれば、彼等は、勞働に價値を創造する力を負はするものゝ如くリカアドを解釋する。彼が頭文字をもつた勞働といふ文字に資本の作用を含有せしめて、之を論ずれば、彼等は、小文字をもつた勞働に簡單な骨折り、又屢々簡單な手先の骨折を意味せしめて、それに就て論ずる。云々』⁶⁾

以上例示したる所に依り、余は、リカアドの價値論とマルクスのそれとが全然別種の價値論であつて、既に最初より根本なる差異がある——それが、リカアドに對するマルクスの誤解より生じたることを問はず——と解する學者の所説を紹介したのであるが、惟ふに此種の論は、餘りに兩

1) 譯者註

2) Marshall, Principles, (Appendix), p. 816.

3) 彼れとはリカアドを指す。

4) 『廣義の勞働』の意に解するを得ん。

5) 『狹義の勞働』の意に解するを得ん。

6) Gonner, Introductory Essay, Ricardo, Principles, p. LVIII.

者の結論の差異に重きを置き過ぎて、それに至る経路の差或は立場の別を看過したる嫌は無いであらうか。果してリカアドとマルクスとは、其各々の價值論の最初より最後に至るまで、全然別個の道を辿つて來たものであらうか。余は余の分類による第三の見解を採る學者の説を次に擧げ、然る後に此疑問を解決しやうと思ふ。

(ハ) リカアドの價值論とマルクスのそれとは、議論の起點に於て同一であるけれども、両者の立場が相違せる爲め、結論に於て遂に異なる色彩を帯ぶるに至つたのであるとなすもの。

クヌウト・ヴィクセルは、其著「價值、資本及び地代」に於て、アダム・スミスが貨物の價值(交換價值の意)を測定する勞働に、貨物の生産に費さるゝ勞働の義と生産されたる貨物が支配する所の勞働の義の兩者を含ましめ居ることを論じたる後に、述べて曰く、

『……彼にとつては、「勞働」とは常に財の生産に費されたる勞働の分量のことである。それにも拘らず彼は、勞働といふ命題を交換價值の尺度として固持し得るものと思つた、さうして彼は此命題を、經濟問題に關する著作に於て餘り例を見ないやうな精力と徹底とを以て解説した。社會主義者、殊にマルクス學派の社會主義者は、人の知る如く、リカアドの價值論を、全資本家的社會秩序に對する直接の攻撃武器として利用することが出來ると信じた。云々』²⁾

又曰く、

『リカアドが資本利潤の成立方法について詳しく穿鑿しないで、これを自明の事實として單純に假定したることが、一三二の經濟學者によつてリカアドに對して非難されて居る。余は此意見に

1) 彼はリカアドを指す。

2) Knut Wicksell, Wert, Kapital und Rente, S. 7

賛同することが出来ない。資本家は、リカアドにとつては、事業の企業者である。だから、彼が一度労働賃金及び地代を支拂つた上は、或は此等のものを前拂した以上は、生産の結果は彼に屬するのである。』

斯の如くにして、ヴァイクゼルは、利潤に關するリカアドの立場を是認し且つ之を辯護しつつ、遂にリカアドと共に純粹なる労働價值論の支持すべからざる所以を論じて居る。是に由つて推論すれば、リカアドの價值論もマルクスのそれも其の出發點に於ては同一であるが、マルクスは彼れの立場よりして此出發點に於て得たる根本命題を固守したけれども、——(ヴァイクゼルは之に對しては賛成が出来ないのであるが)——リカアドは、彼が資本家の立場に立つて居る爲めに、利潤を企業者たる資本家の當然の所得なりと考ふるに至り、——(かく考ふるに對し、ヴァイクゼルは何等疑問を挟む餘地がないのであるが)——遂に本來の純粹なる労働價值論を離れ、爰にマルクスと異なる結論に到達した、といふことになるであらうと思はる。

ヨゼフ・グルンツェルは、其著『價值と價格』に於て、次の如く述べて居る。

『労働價值論の古い代表者(アダム・スミス、リカアド等を指す——譯者註)は、原始的社會狀態を説明することに依つて、彼等の斷定に到達した、欲望満足の爲めの自然物の占有を齎らす所の骨折りの中に、價值の本來の源泉を求むべきであると思ひ做しつつ、併し乍ら、後の代表者、即ちロオドベルツス及びマルクスにとつては、此考(労働が價值の源泉であるといふ考——譯者註)が彼等に、工場工業によつて惹起されたる變革の眼前に於て、労働者階級の利益になる

やうに立ち現はれ、かくて此理論を一定の經濟政策の目的に役立つやうに利用するの可能性を與へたので、その爲めに賛成するに至つたやうに見える。加之此際労働なる概念は肉體的労働にのみ限られた。¹⁾又曰く、

『……リカードは、價值構成に對して、資本に、尙ほ一つの、さうして確かに全く第二次的なる役目を指定した。彼れの見解に従へば、現代の生産行程に於ては、生ける労働、機械及び其他の資本財に蓄積され居る労働、並びに其外此資本財に蓄積され居る企業者利潤が、共に作用するのである。²⁾』

以上引用せる所に由て觀るに、同一の労働價值論も、其の主張者の立場の相違に従て、——即ち資本主義經濟組織是認の立場に在るリカードと、『労働者階級の利益になるやうに』劃策し、主張する所の社會主義の立場に在るマルクスとの間の相違に従て——各々其意味を異にするものなること、及び立場の相違は、現代の生産行程の説明に際して、遂に、純粹なる労働價值を飽くまで固持するもの(即ちマルクス)と、之を維持する能はずして労働以外の價值決定要素(即ち資本)を引入るゝに至りしもの(即ちリカード)とに、分裂せしめたることを、グレンツェルが認めたるは明かである。

以上を以て、リカードの價值論とマルクスのそれとが、兩者の立場の相違せる爲め結論に於て異らざるを得なくなつた、と解する學者の説を例示したのであるが、惟ふにかゝる説を明瞭に叙

1) Josef Gruntzel, Wert und Preis, S. 72.

2) Gruntzel, a. a. O., S. 73.

述せる學者は其數に於て甚だ少いやうである。現にヴィクセルやグルンツェルの解釋も、甚だ明瞭である、とは言へないであらう。併し乍ら余は、此説を以て最も明確に兩者の關係を説明し得たり、と解するものである。蓋しそは、(イ)に擧げたる學者の説の如く、單に兩者の價值論の一部を比較したるのみにて直ちに其全體の觀察をなしたるものと速斷したり、或は兩價值論の表面的の一致を觀て直ちに其の本質的合致なるべしと誤斷したりするの愚を學ばず、又そは、(ロ)に擧げたる學者の説の如く、兩價值論の結論の差異に重きを置き過ぎて、兩者を全然別個の價值論であるやうに斷定するの弊に陥らずして、長く全體的に亘つて兩者の出發點より其の結着點に至るまでの経過を洞察したるもの、如く思はるゝからである。されば余は、以下項を改めて此點に關する稍詳細なる説明を試みるであらう。